

書評・紹介

鬼頭 宏著『日本二千年の人口史』

PHP 研究所, 1983年 2月, 206ページ

近年日本語で書かれた人口の本でこれほど面白いものは見当たらない。これが読後の第一印象である。本書は石器時代から現代に至るわが国の人口史を最新の歴史人口学的研究の成果に基づいて概説したもので、日本の人口史への格好の道案内の書といえる。しかし、それ以上に本書は、人口というものがいかに時代の経済、社会、いな自然環境とすら密接に関係しているか、そして何よりも人間の歴史を理解するうえで人口史——それは同時に民衆史でもある——を解明することがいかに重要であるかを教えてくれる。

著者は日本の人口変動を大きく4つの波によって捉える。第1の波は縄文時代、第2の波は弥生時代の稲作農耕の普及に始まり荘園制の成立まで、第3の波は経済社会化の始まった13～14世紀から江戸時代の前半まで、そして最後の第4の波は江戸時代の末から始まり今日まで続く近代の人口転換である。

この人口変動の4つの波をひき起こす要因としてはもちろん技術進歩——稲作農耕の開始や産業革命——と経済組織の変化——経済社会化による小農経営の普及——も挙げられてはいるが、それと同等、あるいはそれ以上に自然環境の変化——気候の寒冷化あるいは温暖化——が重視されているところが面白い。すなわち気候の温暖化は東日本における食糧の獲得、保存の効率に有利に働き、逆に寒冷化は不利に働いた。そのことが人口の増減と結びついて政治経済の重心を東西に揺り動かしたというのである。

しかし本書の圧巻は何といっても『宗門人別改帳』の分析に基づく新しい江戸時代像の提示にある。農業経済が行き詰まり幕藩体制の矛盾が露呈してきた18世紀、領主の苛酷な収奪、度重なる天災と人口圧力によって農民の生活は最低生存水準線にまで落ち込み、飢饉、疫病が蔓延し貧困ゆえの墮胎、間引きが横行した。ニュアンスの違いこそあれこれが江戸時代後半に関するわが国歴史学界の通説であった。

『宗門人別改帳』などの資料を用いた歴史人口学的研究が示唆する江戸時代はこれとは全く様相を異にする。まず全国人口の停滞は全国一律に起こったものではなく東北日本の減少と西南日本の増加がたまたま相殺であった結果であり、都市が農村の人口増を喰いつぶした結果である。また人口増加の停滞はマルサスのいう積極的抑制（死亡率の上昇）によるというよりも予防的抑制（出生抑制）による。その結果、農民はたとえば同時期の中国などと較べるとはるかに高い1人当たり所得水準を享受することができ、これが江戸時代末から明治期への経済発展に結びついた。墮胎、間引き、それは貧困のゆえではなく豊かさを守るための積極的手段であったというのである。

このような新しい江戸時代像はもちろん著者一人の見解というよりも歴史人口学、計量経済史研究にたずさわる研究者のある程度一致した見方なのであろう。だがこれを門外漢にも実に分りやすくまとめあげ、解説したところに著者の並々なぬ文才を感じる。

最後になったが、間引きの社会的機能に関しては「間引きは、家族規模制限というよりも出生間隔の調節に用いられた」というカール・モスク (Carl Mosck) の見解などもあるが、これについての著者の意見が欲しかった。また著者も指摘しているとおり、宗門人別改帳などのデータ分析に際しては申告漏れがどの位あったかを推定することがきわめて重要であろう。補正の方法はいろいろあるのであろうが、新しい試みとして結婚、出産に関するマイクロシミュレーション・モデルを構築しそこに宗門人別改帳のデータを投入し、不明確な部分を推定していくといった方法は考えられないのであろうか。

本書は“人口学を10倍楽しくする本”である。一読をお勧めする。

(阿藤 誠)